事例 01

せたな町

～輪になって つなぐ「せたな」の 夢未来～

せたな町のシンボル三本杉岩

町の素顔

人　口　7,625人（R2.9.30）
高齢化率　46.4%（R2.9.30）

檜山北部の日本海側に位置し、一級河川後志利別川が流れ、道南の最高峰狩場山をはじめとする山々が連なるなど、豊かな自然環境を有す。平成17年、3町の合併により誕生。

担当部署　せたな町保健福祉課・地域包括支援センター

事例に関するワンポイント

- 高齢者世帯に占めるひとり暮らしの割合：35.7%（平成27年）
- 要支援・要介護認定率：20.4%（平成29年）
- 生活支援ニーズは、「移送サービス」、「外出同行」の順に多い
- 多職種連携による課題共有や在宅医療・介護提供体制の構築を推進
- 条例等による介護保険以外のサービスも展開中

せたな町には介護・福祉の分野におけるスタッフの人材確保や財源の確保という課題があり、地域の中で住民同士が支え合うことで、安心して暮らせる環境を整備する必要がありました。一方、福祉サービス等について地域住民と行政が意見交換を行った「住民参加型高齢者生活支援等推進事業」（平成25年度:道補助）がきっかけとなり、サロン活動やお弁当配達サービスなど、各地区で住民主体の活動も見受けられるようになりました。

総合事業の見直し時に、生活支援を必要とする高齢者の日常生活を支援することや、住民主体のサービスを実施しようとするボランティア団体等への支援を目的とした「せたな町生活サポートセンター」を開設し、訪問型・通所型のサービスBに対しての補助を行うなどの支援を行っています。現在、同サービスは訪問型と通所型において各3団体が担っていますが、サービス単価等は支える側の善意に依存しないように各団体が運営費等の必要経費を賄えるように設定しています。

同町における生活支援サービスは、サービス提供側から利用者側への一方通行の関り方ではなく、アクティブシニアが利用者の生活を支援することを通じて「新たな生きがい」を生み出すことにつながることも期待しています。このように、住民が主体となった動きが活発化し、町と連携した取組みが増えてきていますが、「地域の支え合いの力を活かすことで、安心して暮らせるまちづくりを推進していきたい」（保健福祉課）と考えています。

サービス単価と利用者自己負担額

	サービス提供時間	サービス単価	利用者自己負担額（2割）
訪問型サービスB	30分未満	500円	100円
	30分以上～1時間未満	1,000円	200円
	1時間を超える場合	30分未満を1単位として500円を追加	サービス単価の2割
通所型サービスB	1時間以上3時間未満	1,000円	100円
	3時間以上～5時間未満	2,000円	200円
	5時間以上～7時間未満	3,000円	300円

OMK6（オー・エム・ケー・シックス）

代表者　大関 昭司
サポーター（団体構成員）数　7名
設　　立　平成29年

サービス中の一コマ

OMK6は平成29年から訪問型サービスBによる生活支援を行っています。団体名の由来は3組（6人）のご夫婦の姓の頭文字で、ヘルパー経験のある大関和子さんと10年以上一緒に仕事をした元同僚の計7人で活動しています。設立のきっかけは包括支援センター所長からの声かけで、元々地域で支え合いの活動が必要と感じていた和子さんは、ご主人（代表）らと共に団体を立ち上げました。

利用者は北檜山区に居住する70代後半から90代前半までの男女6人で、掃除やゴミ出し、買い物代行、簡単な調理などのお手伝いが中心になっています。1年間の利用計画を用意している方や「次、いつ来るの?」と言う方もおり、利用者ニーズの高さを伺い知ることができます。

「この活動は生活するための収入を得ることは無理だけど必要なもので、ヘルパーを利用する前段階」と和子さんは話します。介護計画に縛られるヘルパーと異なり、介護保険枠外のサービスを気楽に提供できることが魅力で、男性陣も大工や草むしり等で活躍していますが、ヘルパーと混同されているようで「仲間がなかなか増えない」（和子さん）のが目下の課題となっています。

シニア福祉サポートせたネット

所在地　久遠郡せたな町北檜山区北檜山267-1
代表者　道高 睦子
サポーター（団体構成員）数　8名

サロンに集うみなさん

せたネットが運営する「なごやかサロンすまいる」は、代表の夫で副町長経験者でもある道高勉さん（現・町議）が北檜山区市街地にある元旅館をサロンの場所として買い上げ平成27年に開設し、平成29年から通所型サービスBに移行しています。活動場所は台所等を含めて約150平米あり、特に冬季は維持が大変な部分もありますが、公共施設と異なり「自由度が高い」（勉さん）ことがメリットです。現在、3組（1組約10名）が週1回ずつ（月6回開催）、午前10時から約6時間（冬季を除く）、茶話会やミニ講和、カラオケなどをして過ごします。現在、ご夫婦を手伝うサポーターは70代が中心で、利用者は70～80代の女性が多くなっていますが、「年金の範囲内でフレイル予防になる活動を続けていくことが、町の将来のためにも重要」と勉さんは力を込めます。

また、サロン以外の活動としては、道社協の助成金を活用した「シニアカラオケ交流会」を毎年開催。歴代のグランプリが各地域に出向く慰問活動では、得意なことで拍手をもらい役に立っている実感を得ているそうです。今後の課題は「サロン等へ通う高齢者の移動手段の確保です」（勉さん）